

浅井了意における中国明末善書文化の受容

—顔茂猷著『迪吉録』を中心に—

董 航*

(e-mail: 2020wataru@gmail.com)

<目次>

- | | |
|----------------------------|----------------------|
| 1. はじめに | 4.1. 『迪吉録』全体への横断的な利用 |
| 2. 先行研究に見る浅井了意の仮名草子執筆と善書受容 | 4.1.1. 原著の徳目 |
| 3. 勸善思想家顔茂猷と『迪吉録』 | 4.1.2. 著者の評論(=原著の思想) |
| 4. 浅井了意の『迪吉録』受容 | 4.2. 自著同士の相乗効果への配慮 |
| | 5. おわりに |

キーワード：善書(Zensho)、迪吉録(Tekkitsuuroku)、浅井了意(Asai Ryoi)、仮名草子(Kanazōshi)、仏教(Buddhism)

1. はじめに

本稿の目的は、浅井了意(生年不詳～1691)の仮名草子に見られる中国明末の勸善思想家¹⁾顔茂猷(1578～1637)著『迪吉録』の影響を中心に検討し、その中国明末善

* 日本国お茶の水女子大学大学院博士後期課程、比較社会文化学

1) 酒井忠夫が明末善書の盛行ぶりをその時代ならではの思想風潮と見取り、「善書運動」と位置付けているのに対して、呉震はそれを踏まえてこの思想風潮を実質的に「勸善運動」、顔

書文化受容の態度を明らかにすることである。

善書は勸善書ともいい、中国の宋代に現れ明末清初期に盛行を極めた儒仏道の三教融合が見られる勸善懲惡を趣旨とした通俗的な道德読本である。内容としては、『迪吉録』のような具体的な故事や生活事象を通して教訓を説き聞かす説話集もあれば、それと並んで範立本編纂『明心宝鑑』^{めいしんぼうかん}のような儒教を始めとする三教の経書・文献から収集された箴言集もある。これらの中国善書は本国のみならず、十五世紀頃の朝鮮や江戸時代の日本にも伝播し、当時の知識人に共鳴され、文学・文化・思想・道德などの側面から社会発展に影響を与えた。

善書研究について、専門書を著した酒井忠夫²⁾は、近世初期の日本と明末清初の中国の学問・文化を支える歴史的社会的要素が相通じていたことが、中国の善書の日本文化への吸収を促したと述べる。同書の約四十年後の増補版では、さらに中国善書の宗教結社との関連や庶民生活への影響について実証的に明らかにし、江戸時代の日本文化に及ぼす中国善書の影響並びに流通を整理した。

酒井の増補版とほぼ同時期に清代善書の専論を著した游子安³⁾は、中国江南地区を中心とした研究調査を行い、善書の伝播と流通の社会背景、読者の考え方ないし善書と他の勸戒書との関係を整理し、善書の制作は善人・善書・善会または善堂という「三位一体」によって形成された完全なシステムであることを述べた。つまり、善書は文書の体裁のみならず民間宗教信仰の具現でもあり、善書と慈善活動の関わりから明清以後の社会的変遷を究明することができる⁴⁾と指摘した。

上記酒井の研究が日本における中国善書文化の影響が示唆されているにとどまっているのに対して、肖琨は「江戸期善書に関する研究」⁴⁾として、儒学・仏教・国学・神道・民間信仰など広汎に及ぶ江戸時代思想全般への深甚な影響とその「日本化」の様相と構造を具体的に明らかにした。そして、三教合一的善書思想は「自我」形成と深く関わる思想として江戸期民衆の低層から上層階級に広まり、

茂猷を勸善思想家と指摘している。(呉震(2016)『明末清初勸善運動思想研究』(修訂版)上海人民出版社、pp.1-3.)

2) 酒井忠夫(1960)『中国善書の研究』弘文堂、同氏(1999-2000)『増補中国善書の研究 上・下』国書刊行会。

3) 游子安(1999)『勸化金箴：清代勸善書研究』天津人民出版社。

4) 肖琨(2011)「江戸期善書に関する研究」立命館大学、博士論文。

善書を抜きにしては江戸時代思想史全体さらには朝鮮王朝も含めた東アジアの思想史全体も理解しえないことを結論的に述べた。

以上の研究から、中国宋代以降の庶民社会の発展及び三教兼修風潮の下で作成され流通した善書とそれにより形成された善書文化は、近世日本に伝播し影響を及ぼしたことがうかがえる。日本における善書受容の様相における研究は、中国明末清初期の社会実態をよりの確に捉えるための独特な視点で、東アジアを始めとする儒教文化圏の学者に展開されていたのである。

2. 先行研究に見る浅井了意の仮名草子執筆と善書受容

本稿で対象とする浅井了意は、自著の中に数々の中国伝来の説話を取り入れている。了意は近世国文学史上において非常に名高い仮名草子の代表的な作者であるとともに、浄土真宗大谷派の僧侶でもある。著書は、仮名草子、報告文学(記録文学)、地誌、注釈、仏書、漢籍の翻訳など多岐にわたるジャンルに及び、計七十部六百巻にのぼる⁵⁾。

了意の仮名草子研究⁶⁾においては、その内容が何を典拠としているのかを調査することが大前提である。例えば彼の仮名草子作家としての名を高めた教訓書『堪忍記』について、「『迪吉録』の女鑑によるは勿論、官鑑・公鑑からも得て、この書の数多い中国種の説話の大半の出拠は『迪吉録』から発見できる」ということが指摘されている⁷⁾。遍歴小説『浮世物語』には、上記のほか明代刊行の類書『天中記』や宋代の孫光憲撰『北夢瑣言』なども数か所引用されている⁸⁾。近世

5) 北条秀雄(1972)『改訂増補浅井了意』笠間書院、同氏(1974)『新修浅井了意』笠間書院、野間光辰(1972)「了意追跡」北条秀雄『改訂増補浅井了意』笠間書院、pp.227-267.

6) 本稿では、特に注記しない限り、浅井了意著、浅井了意全集刊行会編(2007)『浅井了意全集』全十九冊、岩田書院所収の仮名草子、仏書を引用する。以下『了意全集』と略記する。

7) 中村幸彦(1961)『近世小説史の研究』桜楓社、pp.30-62.

8) 前田金五郎(1965)「『浮世物語』雑考」『國語國文』第34巻第6号、京都大學國文學會、pp.29-54、同氏(2005)『近世文学雑考』勉誠出版にも所収。

怪異小説の始祖とされる『伽婢子』は中国明代の怪異小説集『剪灯新話』『剪灯余話』から翻案されている⁹⁾。了意の遺著である『狗張子』は『剪灯新話』を含めて広く六朝・唐・宋の志怪・伝奇小説に原拠を求めている¹⁰⁾。

一方で、成海俊¹¹⁾は、中国明代の箴言集『明心宝鑑』の日本への影響を重視することを主張する酒井の指摘を受け継ぎ、日本における『明心宝鑑』受容の思想史的研究を行い、『堪忍記』『浮世物語』の勸善観を通して了意の『明心宝鑑』受容の特徴を整理した。彼は『浮世物語』が「天」という絶対的存在に基づき、「知足安分」と連携した勸善を教訓とした庶民向けの書であるのに対し、『堪忍記』は勸善懲悪のために広範囲の身分層の人間に対して社会生活の正道を示している書であるとする。この成の研究と相前後して、黄昭淵¹²⁾は善書の受容研究をし、中でも怪談をテーマとする『剪灯新話』とその影響を受けた『伽婢子』との関わりについて検討した。黄は東アジアにおける『剪灯新話』受容の完成形である怪談集『伽婢子』では日本的な場面設定を行っているが、底辺に流れている考え方は中国伝来の思想であり、その思想は三教一致に基づく善書思想であると述べている。

ここまで見てきたように、浅井了意の仮名草子がどのような書物を使って翻案したかを明らかにする典拠論とともに、善書受容の思想史的研究も行われてきており、天道・応報といった三教一致に基づいて勸善懲悪を訴えるという善書思想が、了意の仮名草子の中に反映されていることがうかがえる。しかし、『迪吉録』が『明心宝鑑』と同様に了意の二著作『堪忍記』『浮世物語』の中にかかれていたものの、了意にとって如何なる存在だったのかという思想内容までに踏み込んだ考察はそれほど行われていない。少なくとも『堪忍記』に即して見る限り、

9) 富士昭雄(1966)「伽婢子の方法」『名古屋大学教養部紀要』第 10 輯、pp.1-18.

10) 富士昭雄(1967)「浅井了意の方法—狗張子の典拠を中心に—」『名古屋大学教養部紀要人文科学・社会科学』第 11 輯、pp.30-47.

11) 成海俊(1999)「日本における『明心宝鑑』受容の思想史的研究」東北大学、博士論文。

12) 黄昭淵(1999)「中国善書の受容と怪談・奇談の展開：仮名草子・浮世草子を中心に」早稲田大学、博士論文。同氏(2004)『일본 근세문학과 선서』보고사にも所収。

典拠調査以外の論文は多くない¹³⁾という研究も見られる。

浅井了意の処女作といわれる『堪忍記』は、万治二(1659)年に刊行された仮名草子作品の一つであり、世の中で広く好評を博しており、初版以来、版を重ね息長く読み継がれた¹⁴⁾。同書の全説話の二十五章百七十話に対して、小川は前掲中村の研究を参考にした上で、原話に密着した行文なのかを比較することによって、そのうちの四十八話は『迪吉録』に出拠を求められると推定できると示した¹⁵⁾。花田は原拠や原拠収載書の指摘などに主眼を置き小川指摘以外のものに関してさらに四話を挙げた¹⁶⁾。このような調査視点を踏襲する場合、同書第九章の八、第十一章の五、第十四章の七、第十六章の七、第廿二章の十二という五話も『迪吉録』の影響を受けたと筆者の考察では見出されたが、引用比較の詳細については紙幅の制限により割愛とする。以上のように、『堪忍記』は『迪吉録』から計五十七条の説話を素材として採取・利用しているということが明らかになった。そこで、善書及び善書文化に対する了意の受容を全面的に究明するためには、国文学の仮名草子研究の成果を利用し、『堪忍記』における『迪吉録』の引用を思想的側面から考察することが必要であると考えられる。

以上の先行研究状況を踏まえて、本稿では、浅井了意の仮名草子における中国明末の勸善思想家顔茂猷著『迪吉録』の影響を中心に検討し、その『迪吉録』受容の特徴を明らかにすることを試みたい。具体的には、まず顔茂猷の勸善思想の特質を示して『迪吉録』の内容構成を紹介し、次に『迪吉録』が『堪忍記』『浮世物語』で如何に受容されたのかを考察する。最後に、茂猷と了意との共通点と相異点に注目し、先行研究に見られる了意の中国善書文化の受容と照らし合わせて彼の『迪吉録』に対する受容態度を明らかにする。

13) 柳牧也(2004)「『堪忍記』についての疑義—その構成と内容のこと—」『近世初期文芸』第21号、近世初期文芸研究会、pp.24-37.

14) 浅井了意著、坂巻甲太校訂(1993)『浅井了意集』国書刊行会、pp.319-324.

15) 小川武彦(1975)「『堪忍記』の出典・上の一—中国種の説話を中心に—」『近世文芸研究と評論』第10号、近世文芸研究と評論の会、pp.52-68、同氏(1977)「『堪忍記』の出典・上の一—中国種の説話を中心に—」『近世文芸研究と評論』第13号、近世文芸研究と評論の会、pp.1-12.

16) 花田富二夫(1997)「浅井了意の文事」長谷川強編『近世文学俯瞰』汲古書院、pp.47-62、具体的には『堪忍記』第十三章の五、第廿一章の四・五、第廿三章の三の四話である。

3. 勸善思想家顔茂猷と『迪吉録』

本章では、勸善思想家顔茂猷の生涯と代表作『迪吉録』¹⁷⁾を簡単に紹介する。

顔茂猷は、字は壮其あるいは光衷、中国福建省漳州府平和県出身の人である。天啓四(1624)年に茂猷は挙人になり、死去する三年前の崇禎七(1634)年に進士を特賜されたことから、郷紳¹⁸⁾としてその一生を過ごしてきたといえよう。実は彼は「郷紳は国の望みであり、家に居て善を為せば、郡県を感化させ、州里によい風習をもたらし、後進を培育することができる。その功績は士人に比べると百倍になる」¹⁹⁾(筆者訳)²⁰⁾とあるように、郷紳と士人の身分・資格を区別していた。ここでいう「善を為せば」の具体的な行動として、茂猷が郷里の士人を集め、三教兼修・道徳実践を促す雲起社の結社が挙げられよう。彼の著作集である『顔壯其集』²¹⁾にも「為善は衆生の済度・勸化をもって第一とする。(中略)若し有志者を得て(勸善)の荷担を興起すれば、人の心もこの世も円満になる」²²⁾とあるように、茂猷は講学活動を行い絶えず行善を實踐することによって、社会全般における善い気風の醸成と善い人材の育成に努めていた。

『迪吉録』は、茂猷の勸善思想及び知識人としての立場を示した著書であり、

17) 国立公文書館所蔵『迪吉録』は明崇禎四(1631)年版(請求番号：子 077-0009)と清乾隆四十三(1778)年版(請求番号：308-0097)の二種類の版本がある。明版は清版より一巻多く首巻がある。本稿では、清版を参考にしつつ、明版を底本にしており、以下は『迪吉録』と略記する。

18) 寺田隆信(2009)『明代郷紳の研究』京都大学学術出版会、p.371。本書において、「郷紳」は生員・監生・挙人・進士などの身分乃至資格をもち、郷里に居住する者の総称であったと定義付けられている。

19) 『迪吉録』(度集・郷紳家居懿行之報)、54上。原文は、「郷紳、國之望也。家居而為善，可以感郡縣，可以風州里，可以培後進，其為功化，比士人百倍」。

20) 以下、特に断りがない限り、中国語の訳は筆者による。

21) 『顔壯其集』の現存する刊行本として、国立国会図書館所蔵の明末刊行本『顔壯其集』十六冊(合五冊)(請求記号：YD-古-6781～6782)、国立公文書館所蔵の明末刊行本『雲起集』十二冊(請求番号：308-0104)が挙げられる。『雲起集』に収録された「雲起会語」が『顔壯其集』にはないにもかかわらず、両者は内容的にほぼ一致していると指摘されている(前掲書、呉震(2016)、p.79)。本稿は国立国会図書館所蔵の明刊本『顔壯其集』を参考にし、以下『顔壯其集』と略記する。

22) 『顔壯其集』(第七冊・雲起説鈴)、65上～65下。原文は「為善以度人勸化為第一。度人勸化必以共了性命為極則。若得有意思者興起擔荷，便會滿心滿世也」。

官民間わず有益なものであったとされている。『迪吉録』は首巻と本文の八巻から成っている。その構成を見てみると、「一卷」から「度巻」までの四巻は官鑑で、いわゆる官僚の行うべき道德の事例の説話を鑑戒として具体的に示したものである。「兆巻」から「平巻」までの四巻は公鑑であり、孝悌など家族道德から始まり、明末の庶民道德一般に関する事例を述べたものである。各巻名の頭文字、すなわち「一・心・普・度・兆・世・太・平」には「一心に(衆生を)濟度すれば兆世が太平になる」という意味的なつながりがあり、そこに『迪吉録』の思想的趣旨が示唆されていると考えられる。「平巻」の末尾には、婦徳に関する事例を集めた篇として女鑑が附される。『迪吉録』は歴史的な事例を大量に引用し、説話の末尾に自らの評論を付け加えて勸善懲悪を訓戒することが特徴である。

『迪吉録』自序の冒頭において、茂猷は「世界は只此の慈悲で一脈を引接する。天帝は之をもって法界を監督し、聖賢仙佛は之をもって衆生を濟度し、(中略)閻魔大王は之をもって幽冥界を監査する」²³⁾ということを示し、一儒者として仏・道を融合し、慈悲心をもって勸善を行い救世する趣旨を明確に示した。

以上で述べたように、茂猷は、官民間わずに皆、因果応報に従うものであり、自ら積善を行い、人に勸善を行うように常に努めることこそが人生一大事だという趣旨を『迪吉録』で一貫して主張したのである。

4. 顔茂猷著『迪吉録』を中心に

本章では、まず『堪忍記』『浮世物語』において『迪吉録』の徳目・著者の評論(=原著の思想)がどのように受容されたのかを考察し、原著全体に対する了意の横断的な利用は如何なるものかを示す。最後に顔茂猷と比較して、自らの著作に相乗効果を生み出すための了意の配慮を整理する。

23) 『迪吉録』(首巻・迪吉録自序)、1上～1下。原文は「世界至此慈悲接引一脈，天帝以之提轉法界，聖賢仙佛以之超度群倫，(中略)閻羅大王以之殛察幽冥」。

4.1. 『迪吉録』全体への横断的な利用

了意は茂猷の勸善思想と『迪吉録』を全体的に把握した上で、原著に対する横断的な利用を自由にかつ柔軟に遂行したと推察される。以下では、『堪忍記』『浮世物語』を例に原著の徳目(説話との対応関係)と著者の評論(思想)とに分けて考察する。

4.1.1. 原著の徳目

『堪忍記』は、浅井了意が堪忍の種類を性質・職業などに分けて主題毎に章立てを考え、女性のみならず人間全般に目を向けた書物として完成させたものである。上述したように、同書の全説話百七十話のうちの五十七話は『迪吉録』の影響を受けたとされている。この五十七話のうち、二十八話は原著『迪吉録』における徳目と説話との対応関係が明らかに読み取れると考えられるが、その一例を以下に示す。

『迪吉録』：「開封長婦幼婦生死巧換」²⁴⁾(平集・孝逆報)

『堪忍記』：「開封の翁が新婦の賢なる事」²⁵⁾(廿一 姑につかふる堪忍)

『迪吉録』の平巻女鑑門・孝逆報において、婦人は姑に誠を尽くして仕えるべきであるということが各説話に託して勸戒されている。孝逆報の下にある「開封長婦幼婦生死巧換」という説話では、開封の翁の貪欲な兄嫁が孝行心のある弟嫁の金を盗み、弟嫁を殺したことに天が怒り、雷に命じて罪のある兄嫁を殺し、弟嫁を生き返らせることが語られている。例に見られるように、了意は原著における徳目と説話との対応関係のまま、『堪忍記』第廿一章「姑につかふる堪忍」において、嫁が姑に孝行を尽くすべきであるという趣旨を「開封の翁が新婦の賢なる事」に託して強調した。

一方で、原著における説話と徳目に一対一ではなく、柔軟に対応する話数は二十九条と考えられる。その例を以下のように示す。

24) 『迪吉録』(平集・孝逆報)、72 下～73 下。

25) 『了意全集』(仮名草子編 1・堪忍記)、pp.137-139.

『迪吉録』：「馬翁不以愛子狀其婢再生子貴顯」²⁶⁾(兆集・寛下之報)

『堪忍記』：「宋の馬翁公被官をめぐみし事」²⁷⁾(九 主君の堪忍)

『迪吉録』：「劉寛仁洽三郡官至上公」²⁸⁾(度集・吏治循良之報)

『堪忍記』：「後漢の劉寛か事」²⁹⁾(九 主君の堪忍)

上記の例に挙げた『堪忍記』の二つの説話は共に第九章「主君の堪忍」に収録されている。ここでは、貴賤・上下の品を問わず、人の主君となる者は、部下に慈しみ深く接し、咎をなだめて、何事にも堪忍すべきであることが教訓とされている。了意は、主君が部下に激しくあたれば、家は和合しなくなり、次第に国は乱れるため、これより大きな損はないと主張している。そのため、彼は、家事使用人に寛大な処置を講じることが強調される「馬翁不以愛子狀其婢再生子貴顯」と、地方のまつりごとを治めるにあたって諸階層の人々に仁をもって接することが説かれる「後漢の劉寛か事」とを、共に第九章「主君の堪忍」に統括し、柔軟に原著を利用していた。

以上のように、了意は『迪吉録』元来の応報徳目と説話との対応関係に拘泥せず、職業や階層を超越した人間としてのつながりに注目し、原著全般を柔軟に取り入れることによって、より自由度の高い著述を遂行したとあってよいだろう。

4.1.2.著者の評論(=原著の思想)

『迪吉録』の特徴が、茂猷が説話の末尾に自らの評論を付け加え読者に善悪応報・勸善懲悪を訓戒した歴史的説話集であることを前節で述べた。『堪忍記』の構成も『迪吉録』のパターンを受け継ぎ、説話の末尾に評論を付け加えるという形式である。本節では、原話の末尾に附される評論ともいべき著者の意見を了意がどのように受容したのかを考察する。

結論としては、了意は『迪吉録』を取り入れる際、個々の説話を単なる素材と

26) 『迪吉録』(兆集・寛下之報)、87上～87下。

27) 『了意全集』(仮名草子編1・堪忍記)、p.53。

28) 『迪吉録』(度集・吏治循良之報)、7上～8上。

29) 『了意全集』(仮名草子編1・堪忍記)、p.55。

して取り入れて再構成・再編集したのではなく、同じ応報徳目の下に集積した一連の原話の趣旨と評論を併せて参考にしたと考えられる。

その理由を示す例として、まず『堪忍記』から一話を挙げる。第七章「色欲をとどむへき堪忍」において、了意は性的な欲望をとどめる堪忍として全七話を例に挙げて述べており、そのうちの三話は『迪吉録』の内容と共通している。以下、その中から「王勤政が女を殺してむくひける事」を例示する。本説話の大意は次のようである。王勤政が隣人曹可叔の妻と深い契を交わしたく、二人で駆落ちすると約束した。しかし約束の日を待ちきれずに、彼女は夫を殺してしまった。王はそれを耳にして驚きのあまり逃げた。しかし、行く先の宿に二人分の食事が出されたことから、王はどれだけ遠く逃げたとしても不倫相手の夫即ち曹の亡霊が追ってくることに気付き、里に帰り自首したという話である。そして、末尾に以下のような了意の意見が附されている。

①かの色にまどひて忍ぶ事をわするれば、心は物に飽くことをしらず。いよいよほしむまゝにすれば、いよいよさかりにおこるぞかし。つとめてこれをつゝしめば、又をのづから心おさまる。儒道には、礼にかへれとすゝめたり。②人の妻ををかし、他のゆるさぬ娘ををかし。これまずその礼にそむく。③色欲の事は、鳥けだもの・昆虫の類にいたるまでいづれか愛せざる。人の人たる道より、のをれが欲にまかせて、ほしむまゝに無礼をおこなはず、なんぞ鳥けだものにたがはさらんや。④まして忍びざる非道より悪をまねき、わざわひをもとめ、身をほろぼし、命をうしなふ。まことにいましむへし。

『堪忍記』：「王勤政が女を殺してむくひける事」³⁰⁾

本説話に関して、素材として「王勤政誘奔婦不果然為鬼所隨」³¹⁾を受容したことがすでに前掲小川の研究によって明らかになっているものの、思想史的な側面として著者の評論に関する研究は深く行われてこなかった。王には曹を殺す気が

30) 『了意全集』(仮名草子編 1・堪忍記)、pp.35-37.ここでは論考上の便宜のため、引用文に①、②、③などで番号をつけておく。

31) 『迪吉録』(兆集・漁色宣淫之報)、73 下。茂猷の評論の原文は「王勤政無欲殺其夫也、婦自計死之、而政以宣淫當其辜奸之謀殺也、殆非意所能規避與」。

なかったが、曹の妻が自ら計らい夫を死なせたという説話に対して、茂猷は「王は公然と淫乱をするから、姦通の意あつての謀殺に当たることになり、思うままに罰は避けられるものではない」とあるように、簡略に評論をつけた。

しかし、了意の評論は本説話に対する評論のみならず、当該説話と共に『迪吉録』の兆卷宣淫門・漁色宣淫之報に収録された「張舉子從擲釵婦相對就刃」³²⁾からも着想を得ていたと考えられる。具体的には、①は「若者の欲竇は至らぬ所がない。口腹の欲と同様に、放縱するほど狂気になる。自ら身を慎むほど、益々恬淡となり欲が少なくなる」、②は「冥律曰く、人の妻を犯す者は子無き報を、人のうちの娘を犯す者は子孫淫乱の報を与えられる」、③は「己の欲に任せ無礼をふるまうことは鳥獸と異ならぬか」、④は「少しずつ忍びながら戒めていく方がました。人を傷つけずに済むし、陰徳も積む」といったところから、それぞれ相互に密接な相関関係が読み取れる。

つまり、了意にとって『迪吉録』は単なる話材の源泉のみならず、著者の評論をも参照できる書物であった。しかもこのような参照は、先ほど検討した徳目と同様に、了意が評論も横断的に柔軟に利用していたものであると推察される。

次に『浮世物語』からもう一例を示しておく。『迪吉録』の世卷機巧門・機巧僥幸之報「唐三盜以得金而喪命」³³⁾を翻案した『浮世物語』巻三の六「ぬす人の事」という説話がある。宝物を手にした三人の盗人がいた。飯を買いに行った一人が宝物を独占するために飯に毒を投与した。留守の二人が宝物を山分けするために飯を買ってきた人を殺そうとした。結局、投毒者は殺害され、殺人者も毒死したことが語られている。末尾に了意は以下のように意見を述べている。

そのことく、輕薄・表裡をいたす事、主君の氣にいりて物をもらひ、知行の加増をも給はらんと、たがひに目かけて、我人をそしり、人われをそしり、たがひに、へつらひうそをつく故に、天罰あたりて、両方ながら身上を滅却する、かの

32) 『迪吉録』(兆集・漁色宣淫之報)、74下～75上。茂猷の評論の原文は、「少年欲竇，何所不至，辟如口腹嗜味，愈縱愈狂，力自斂飭，則益淡將去矣，(中略)陰律有云，姦人妻者，得絶嗣報，姦人室女者，得子孫淫泆報，(中略)何似漸忍漸戒，亦省些腸斷，累些陰功乎，有倡此蠱人者，罪亦必及之」。

33) 『迪吉録』(世集・機巧僥幸之報)、71下～72上。

ぬす人のたぐひなり。(前略)まことの侍は、人のよきをねたます、人のあしきをばかくしてひろめず、をのれ他人の善悪を鏡として身をつゝしみ、こと葉をつゝしみて礼あつく、心だて正直なり。国をおさむる主君は、この人をあけて用ひらるべし。たゞし、この人をする事、賢なる君にあらずしては。

『浮世物語』：「ぬす人の事」³⁴⁾

原話「唐三盗以得金而喪命」には評論が附されていない以上、これは原著と相異なる了意の独特な補足であり、人間の悪行に対する応報として天罰が与えられるという訓戒であるとうかがえよう。が、原著の同徳目「機巧僥幸之報」の下にある他の説話には茂猷が意見を付け加えている点を見落としてはならない。「春申君陰図受刺殺」³⁵⁾に「二人はこの意を立てる時はすでに神明を怒らせてしまった」、「宋齊丘沈景昇而誅死」³⁶⁾に「此れはすなわち応報だ」、「李循模攘貢囑選不售竟恨死」³⁷⁾に「なんと鬼神がそれ故賞罰の意を示し善悪の報を顕彰するのではないか。ああ、畏れるべし」という評論がそれぞれ附されており、いずれも「ぬす人の事」に附した了意の評論と呼応していることが推察される。

ここまで見てきたように、了意は『迪吉録』を素材庫として題材を選択・利用したのみならず、原話の末尾に加筆された著者の評論、さらには、そこに含まれた中国明代の善書が持つ勸善懲悪的思想と因果応報的要素³⁸⁾も必要に応じて適宜取り入れたのであった。

4.2. 自著同士の相乗効果への配慮

以上のように、勸善懲悪的思想や因果応報的要素を複数の著作において機能させることによって、個々の著作がもたらす以上の結果を生み出すことは、著者の意識的な執筆活動であると考えられる。

34) 『了意全集』(仮名草子編1・浮世物語)、pp.366-368.

35) 『迪吉録』(世集・機巧僥幸之報)、70下。原文は、「二人立此意、已得罪神明矣」。

36) 『迪吉録』(世集・機巧僥幸之報)、71上。原文は、「即此便是報應」。

37) 『迪吉録』(世集・機巧僥幸之報)、73下。原文は、「豈非鬼神故示與奪之意、以彰善惡之報哉。吁、可畏也已」。

38) 成海俊(1996)「『明心宝鑑』が日本文学に与えた影響—ことに浅井了意の『浮世物語』を中心として—」『日本文学』第45巻第6号、日本文学協会、pp.11-21.

まず「堪忍」という仏教用語の用例を考えてみよう。『堪忍記』冒頭の第一章「忍の字の評」³⁹⁾において、了意は「堪忍」を「万事を心のままにふるまはず、つつしみつとめてよくこらゆるを、堪忍とは申す事也」と解釈し、娑婆世界、いわば堪忍世界⁴⁰⁾で生活を営む人々を対象に、儒教でいう五常や仏教でいう五戒⁴¹⁾を持って常に自らを戒め堪忍を第一とすることを本書の基調として定めた。「堪忍」は『堪忍記』各章の題目だけではなく、評論に当たる部分においてもキーワードとしてしばしば提示されている。「堪忍」という言葉が遍歴小説『浮世物語』において、了意の意見というべき主人公浮世房の諷誡教訓に当たる部分にも現れたことは注目に値する。

『浮世物語』巻二の三「大坂くんだり 付 大工異見物かたりの事」⁴²⁾にある「おやかた、異見するやう、万事みな、初めは成がたけれども、功をつみて鍛煉すれば上手になる。とかく堪忍なければ、いつれの道も仕ならひおぼゆることなし」は、その一例である。これに対して、『堪忍記』第十四章「職人の堪忍」の冒頭⁴³⁾には「初めは立れもせず、しやれかうべも落やすけれども、つとめて堪忍し、やうやく調錬して、人をもばかすほどには成と聞えたり」と書いてある。よく見比べれば、両者は「堪忍」という言葉を共通に使用しただけではなく、「堪忍」を訓戒する際の口調も極めて一致していることがうかがえる。

次に、意識的に自著同士に相互に関連性を持たせるという点は、上記した『浮世物語』と『堪忍記』に共通な「堪忍」及び「堪忍」の教訓のみならず、『堪忍記』と了意著述の仏書『阿弥陀経鼓吹』^{あみだきょうくすい}との間にも見られる。

和田恭幸⁴⁴⁾は『阿弥陀経鼓吹』から「忍相具サニ予ガ所述ノ堪忍八軸二書ス」

39) 『了意全集』(仮名草子編1・堪忍記)、p.20.

40) 『了意全集』(仏書編1・阿弥陀経鼓吹)、p.670.原文は、「娑婆ハ梵語ナリ翻シテ堪忍ト云フ悲華経曰云何名娑婆是諸衆生忍受三毒及諸煩惱能忍斯惡故名忍土矣」。

41) 五戒は仏弟子として守るべき五つの戒めであり、不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語・不飲酒の五つである。五常は仁・義・礼・智・信を指し、儒教倫理説の根本となる教義である。

42) 『了意全集』(仮名草子編1・浮世物語)、pp.343-345.

43) 『了意全集』(仮名草子編1・堪忍記)、p.90.

44) 和田恭幸(1992)「『堪忍記』の性格」『近世文芸』第55号、日本近世文学会、pp.1-8.

45)など「堪忍」にまつわる諸々の教訓を選出し『堪忍記』との比較検討を行った。本書が、仏教関係者が仏書で足りないところを『堪忍記』の中の説話で補う使命を担った存在であり、仏書とは別々に教化していないところから、『阿弥陀経鼓吹』から『堪忍記』への参照指示が出されたと指摘した。前田一郎⁴⁶⁾は、なぜ『堪忍記』に仏法宣揚の役割が付与されたかに関して、了意は早くから唱導を課題としながらも、三部経について解説してくれる人もおらず時期も合わなかったため、仮名草子という媒体を選んだと述べた。

一方、茂猷は『迪吉録』を警世救世の書と位置付け、「迪吉録全集は講読に備えて用いるものである」と述べ、本書を日常生活における手引きとして大いに参照してほしいと考えていた。こういった茂猷の願望は『顔壮其集』においても繰り返して述べられていた。『迪吉録』の利用場面や方法として、茂猷は「郷約の時に弁舌者を選抜し講読内容をその時ごとに変えるようにする。内容の順次更新は聞き手も話し手も倦厭にさせない。礼儀正しい講読の場に観衆も集まる。若し一郷の老少が集い共に聞き習うことができれば、これが大禮大樂になる」⁴⁷⁾としたように、詳細に提案している。その理由として、「善事は常に身をもって行う。善人は常に口をもって講ずる。善書は常に世に向かって伝える。郷約の時に(中略)観衆が大勢集まるから、善書の伝播・教化が最も速い」⁴⁸⁾と彼は考えていた。

このように、茂猷は『顔壮其集』において『迪吉録』への参照指示、了意は『浮世物語』や『阿弥陀経鼓吹』において『堪忍記』への参照指示をそれぞれ出したのである。それは、両者ともそれらを個別の著作ではなく、自らの思想体系において民衆に善を伝え広め、正道を示す教材としての役割を果たす一書と位置付けたからではないかと考えられる。

45) 『了意全集』(仏書編1・阿弥陀経鼓吹)、p.671.

46) 前田一郎(1990)「浅井了意の思想—『勸信の論理』と仮名草子—」『真宗研究』第34号、眞宗連合學會、pp.101-123.

47) 『顔壮其集』(第七冊・雲起説鈴)、65上~65下。原文は「迪吉録全集以備講説之用。若郷約時輪換講條、擇善講著次第迭説。(中略)蓋輪換講條、則聽者不厭、次第迭説、則講者忘倦、有禮有儀、則聳人觀瞻。若得招一郷父老兒童共習聽之、大禮大樂在是矣」。

48) 『顔壮其集』(第七冊・雲起説鈴)、54下。原文は「善事要時時在身、善人要時時在口、善書要時時在世。至郷約時、過舟時、和尚祭孤訪經時、觀者甚衆、傳化尤速」。

5. おわりに

本稿では、文筆に優れ、真宗教団の一員として仏教思想を立脚点に著書を記した浅井了意が、儒教を主導とする三教融合論者である顔茂猷の勸善思想及びその著書『迪吉録』をどのように受容したのかを整理した。その結果、了意が時代や読者に応じて個々の話材から道德綱目・著者評論だけではなく、自らの思想全体の枠組みにおける各著作の役割分担に至るまで、『迪吉録』を最大限かつ横断的に参照・利用していたことがうかがえた。

近世初頭の日本では、民衆を教化し社会を安定させるために、仏教は「政治の論理に基づき、全人民を対象に、人倫の指導者・思想善導の牽引車としての任務を負わされた」⁴⁹⁾のである。そうした時代の下で、了意は『堪忍記』において、人間は善悪がすべて天に知り尽くされ、天より自らの善悪行為に対応する賞罰を受けるため、日常生活を送る中で堪忍を第一として積善すべきことを訓戒していた。『堪忍記』の約六年後に著した『浮世物語』においても、了意は主人公浮世房の口を借りて現実社会を単に諷刺・批判するのではなく、善を為し天に応報を任せるという『堪忍記』に相通ずる趣旨を繰り返し伝えていた。

一方、明末清初期の中国においては、社会変動が非常に激しくなり、各階層の矛盾や衝突が日増しに深刻になっていた。このような乱世の中で生業を営む人々に精神的な安らぎをもたらし日々の行動指針を与える勸善書は、儒教の宗教化と三教一致的な道德実践化が同時進行する風潮の中で、盛行を極め広く読まれていた。そのような中で、茂猷は、人間は「元命自作、多福自求」を信じて儒教でいう孝悌忠信(=五倫)、仏教でいう戒行修心(=五戒)を日常生活の中で励行し、「常に善言を述べ、善事を談じ、善報を説く」⁵⁰⁾ことに努めるべきであると『迪吉録』を通して読者に訴えていた。

49) 長谷川匡俊(1979)「近世浄土教における理想的僧侶像」圭室文雄・大桑斉編『近世仏教の諸問題』雄山閣、p.197.

50) 『迪吉録』(世集)、1上。原文は、「時時述善言、談善事、説善報、則度已多矣」。

成の研究⁵¹⁾と照らし合わせてみると、今の身分や地位を素直に受け止め、ひたむきに因果応報を信じて為善すれば必ず天道から善報を与えられるということが、了意の中国善書文化を受容する際の共通の態度であることがうかがえる。そもそも勸善の本質が人々の精神生活を向上させたいという願望を特徴としており、明末善書流通と善行実践の動力源ともなっていたという状況が中国の明清時代にも日本の江戸時代にも共通して見られる⁵²⁾。

しかしながら、顔茂猷と浅井了意の思想のよりどころの相異点について考察すると、顔茂猷は社会秩序の再建や世道人心の改善に苦心し、善書の普及や道徳の向上に大きな役割を果たした一儒者・一郷紳であった。それに対して、浅井了意は不遇な流浪生活を長期にわたり送ったが、「学を志して唱導を懐う」⁵³⁾という人間教化への本懐に変わりがなく、遂に出家得度をして大谷派に帰参した一仏者・一僧侶である。つまり、境遇や思想的背景を異とする両者の儒仏道の三教融合を捉える視座が根本的に異なっているのである。

なお、本研究を通して儒教的・世俗的の孝から仏教的・究極的の孝へと漸進する了意の孝道論も興味深い課題であるという認識を得たが、この点は別稿を期したい。

〔後記〕本稿は韓国日本文化学会2018年度第55回国際学術大会における報告を基に大幅に加筆・修正した上でまとめたものである。

【参考文献】

小川武彦(1975)「『堪忍記』の出典・上の一 —中国種の説話を中心に—」『近世文芸 研究と評論』第10号、近世文芸研究と評論の会、pp.52-68

51) 成海俊(2001)「『堪忍記』の思想—『明心宝鑑』からの引用を中心に—」『日本思想史研究』第33号、日本思想史研究会、pp.56-69.

52) 肖琨(2015)「善書をめぐる近世仏教の交流」末木文美士編『比較思想から見た日本仏教』山喜房佛書林、pp.142-157.

53) 『了意全集』(仏書編3・観無量寿経鼓吹)、p.729.原文は、「吾昔志于學懐于倡導而無人之解與亦不遇時輕毛飄々徒老矣」。

- 小川武彦(1977)「『堪忍記』の出典・上の二 —中国種の説話を中心に—」『近世文芸 研究と評論』第13号、近世文芸研究と評論の会、pp.1-12
- 黄昭淵(1999)「中国善書の受容と怪談・奇談の展開：仮名草子・浮世草子を中心に」早稲田大学、博士論文
- 黄昭淵(2004)『일본 근세문학과 선서』보고사
- 呉震(2016)『明末清初勸善運動思想研究』(修訂版)上海人民出版社
- 酒井忠夫(1960)『中国善書の研究』弘文堂
- 酒井忠夫(1999-2000)『増補中国善書の研究 上・下』国書刊行会
- 肖琨(2011)「江戸期善書に関する研究」立命館大学、博士論文
- 肖琨(2015)「善書をめぐる近世仏教の交流」末木文美士編『比較思想から見た日本仏教』山喜房佛書林
- 寺田隆信(2009)『明代郷紳の研究』京都大学学術出版会
- 中村幸彦(1961)『近世小説史の研究』桜楓社
- 成海俊(1996)「『明心宝鑑』が日本文学に与えた影響—ことに浅井了意の『浮世物語』を中心として—」『日本文学』第45巻第6号、日本文学協会、pp.11-21
- 成海俊(1999)「日本における『明心宝鑑』受容の思想史的研究」東北大学、博士論文
- 成海俊(2001)「『堪忍記』の思想—『明心宝鑑』からの引用を中心に—」『日本思想史研究』第33号、日本思想史研究会、pp.56-69
- 野間光辰(1972)「了意追跡」北条秀雄『改訂増補浅井了意』笠間書院、pp.227-267
- 長谷川匡俊(1979)「近世浄土教における理想的僧侶像」圭室文雄・大桑齊編『近世仏教の諸問題』雄山閣
- 花田富二夫(1997)「浅井了意の文事」長谷川強編『近世文学俯瞰』汲古書院
- 富士昭雄(1966)「伽婢子の方法」『名古屋大学教養部紀要』第10輯、pp.1-18
- 富士昭雄(1967)「浅井了意の方法—狗張子の典拠を中心に—」『名古屋大学教養部紀要人文科学・社会科学』第11輯、pp.30-47
- 北条秀雄(1972)『改訂増補浅井了意』笠間書院
- 北条秀雄(1974)『新修浅井了意』笠間書院
- 前田一郎(1990)「浅井了意の思想—『勸信の論理』と仮名草子—」『眞宗研究』第34号、眞宗連合學會、pp.101-123
- 前田金五郎(1965)「『浮世物語』雑考」『國語國文』第34巻第6号、京都大學國文學會、pp.29-54
- 前田金五郎(2005)『近世文学雑考』勉誠出版
- 柳牧也(2004)「『堪忍記』についての疑義—その構成と内容のこと—」『近世初期文芸』第21号、近世初期文芸研究会、pp.24-37
- 游子安(1999)『勸化金箴：清代勸善書研究』天津人民出版社

和田恭幸(1992)「『堪忍記』の性格」『近世文芸』第55号、日本近世文学会、pp.1-8

論文投稿日：2018.10.11

論文審査日：2018.11.07

掲載確定日：2018.11.09

〈要旨〉

浅井了意における中国明末善書文化の受容
—顔茂猷著『迪吉録』を中心に—

董航

中国善書は近世日本に伝来した後に、外来文化として当時の知識人によって受容され再編されることが進められていた。浅井了意(生年不詳～1691)は国文学、特に近世文学史上において、非常に名声の高い仮名草子の代表的な作者であると同時に、浄土真宗大谷派の僧侶でもある。彼の教訓書『堪忍記』・遍歴小説『浮世物語』が共に中国明末勸善思想家顔茂猷(1578～1637)が著した善書『迪吉録』を取り入れたことは従来の研究で明らかになっている。

本稿の目的は、浅井了意の仮名草子における中国明末の勸善思想家顔茂猷著『迪吉録』の影響を中心に検討し、彼の中国明末善書文化の受容姿勢を明らかにすることである。具体的には、まず顔茂猷の勸善思想の特質を示して『迪吉録』の内容構成を紹介する。次に『迪吉録』が『堪忍記』『浮世物語』で如何に受容されたのかを考察する。最後に、茂猷と了意との共通点と相異点に注目し、先行研究における了意の中国善書文化の受容と照らし合わせて、彼の『迪吉録』からの参照利用を究明する。

Asai Ryo'i's acceptance of moralistic culture in the Late Ming Dynasty of China
—Focusing on Yan Maoyou's *Tekkitsu roku*—

Dong, Hang

Chinese Zensho, which means Chinese common moralistic books, were creatively rebuilt by intellectuals in Early Modern Japan; their arrival during this period resulted in a kind of “mainlandization” that had an impact on subsequent cultures. Asai Ryo'i, born circa 1691, was a highly renowned author of *Kanazōshi* in the field of national literature—with a focus in modern literature—and a Buddhist monk of Jodo Shinshu Otani-ha. It has been acknowledged that Zensho *Tekkitsu roku*, written by the moralistic philosopher Yan Maoyou (1578-1637) in the Late Ming Dynasty of China, was accepted by Ryo'i and adopted in his admonitory book *Kanninki* and itinerant novel *Ukiyomonogatari*.

The main purpose of this paper is to discuss how Maoyou's moralistic thought and *Tekkitsu roku* had an influence on Ryo'i's *Kanazōshi*, as well as provide evidence that illuminates Ryo'i's accepting attitude toward Chinese Zensho in the Late Ming Dynasty of China. The paper is organized in the following manner: first, I will outline the characteristics of Maoyou's moralistic thought and introduce the composition of *Tekkitsu roku*; second, I will elucidate the reception of *Tekkitsu roku* in Ryo'i's books, *Kanninki* and *Ukiyomonogatari*; and third, I will compare the obtained results with existing research on Ryo'i's Buddhist evangelist considerations of Chinese moralistic culture and clarify his acceptance of *Tekkitsu roku* while focusing on the similarities and differences between Ryo'i and Maoyou.